Meteorological Society of Japan

会員の広場

台風の「上陸」という用語について

1．暴風・豪雨が中心よりも先に上陸する

台風の上陸予想地点と目される強い風雨の海岸に立った放送記者が「台風は刻々と近づいています！」と絶叫するのが各局を通じて毎回のパターンになっている．だがその中継の時間には，台風の実体である暴風や豪雨はすでに上陸しており，災害が起こり始めていることも多いのである．

気象庁は暴風域や暴風域に入る確率を示すなどして中心だけにとらわれることのないように注意をうながしているが，実際にはやはり中心，特に「上陸」が重視されているのが実状である．

ここでは報道関係者や一般の人々の間にあるそのような傾向の原因が主として「上陸」という用語の影響であることを指摘し，その対策についての私見を述べてみたい．

2．台風は中心が最も激しいはずだという誤解

これは某テレビ局の記者から聞いた話である．

台風が○時頃当地方を通過するというので風雨のなか中継車を港まで出した．岸壁に打ち上げる大波の迫力ある画面を期待したわけである．ところが港は意外に穏やかであったし，予定時間を過ぎても大荒れにはならず無駄骨であった，という話である．

実はこの台風は予定どおりの時間に中心（眼）が通り，その後の，いわゆる吹き返しの風もあまり強くなかった．最も迫力ある場面は記者が港に着く以前に終っていたのである．

この記者氏に限らず，一般の多くの人々は台風の中心で最も激しい現象が起こっているはずだと考えているらしいのである．

「台風の風は，一般に中心で弱く，中心から50～100 km 離れたところで最強になり，（中略）300 km 以上も離れたところで最強となる台風もある」（『気候学・気象学辞典』，二宮書店）ということだし，台風に伴う（直接・間接の）強雨域は本土に近づく頃には台風の前面に広がり，後面では範囲が狭く雨も前面よりも弱いのが普通である．このため台風の中心が上陸（内陸では中心が通過）した時には勝負がついていることも多いはずである（洪水などは別である）．

3．「上陸」からの連想が誤解を生んでいる

「上陸」という用語は気象庁の予報用語として定義されているが，これは比喩的または擬人的な性格の用語であって気象用語としてはやや特殊な例に属する．「上陸」は擬人的ゆえにマスコミ受けする用語ではあるが，その連想が飛躍すると誤解につながる．

台風の上陸，で連想されるのは，“ノルマンディー上陸作戦”とか，―それ以前に敗戦になったが―“米軍の日本本土上陸”などの軍事上の上陸だろう．

北上する大型台風が本土に向かって正面から近づいてくるときの緊張感は，敵の上陸を前にした緊迫した空気と共通するものがあるはずだ．「上陸」が重大視されるのはこの連想によるところが大きいと思われる．

それに対して，台風の中心が沿岸すれすれに通る場合に「上陸」か否か，というときの「上陸」は意味がちがう．それは前者が台風の本体が本土を襲う（かどうか）という意味であるのに対して，後者の場合には，台風本体のほぼ半分はすでに上陸しており，それは中心の軌跡が海岸線を切るかどうかという単なる幾何学的な問題にすぎない．

なお，当日発表される「上陸」は防災のための情報の一部であり，後日の解析によって行われる上陸か接近かの区分は台風統計のためのものであるはずだ．そのことは，予報または生活情報として当日発表される梅雨の入り・明けと，梅雨期終了後決定される気候統計値としての入・出梅日との関係と同じだろう．

9311号は当日，九十九里浜上陸，と発表されたが，その後の解析の結果上陸は取り消された（東京が水浸しになったのは台風が「上陸」したからではなかったのである）．

その上陸取り消しを伝える毎日（大阪，9月1日）は「台風11号，関東上陸は幻」という見出しで記事を載せている（東京朝日も同じ見出しであった）．このような「上陸」に対する固執は，軍事上の上陸の成・否や，密

© 1995　日本気象学会

NII-Electronic Library Service

Meteorological Society of Japan

航者の上陸の有・無，のように，台風の場合においても，「上陸」したか否かは重大問題であるはずだ，という連想が働いているものと考えられるのである．

4．軍事上の上陸は最初の上陸で代表される

10数日間にわたるノルマンディー海岸への大上陸作戦はその第1日が上陸の日（Dデー）として戦史に記録されている．だがこの大作戦の代表者である総司令官アイゼンハウアー将軍の上陸日を記載した史料は少ない(Dデーから6日後であったという)．また太平洋戦争における米軍の硫黄島上陸も沖縄本島上陸も最初の上陸日が上陸の日とされている．

軍事上の上陸ばかりでなく，一般に大きなイベントについては，その初日または最初の場所が重視されて全体の代表として記録に残されるのが普通である．

一方台風の場合には，その実戦部隊とも言うべき暴風や豪雨がまず上陸するのだが，それではなく，台風(全体)の代表者にあたる中心(眼)の静かな上陸をもって気象学上の「上陸」と定義しているのである．

このように，台風の上陸の定義が，上陸という言葉から連想される常識的な意味とはちがった形で定義されていることが人々の理解を混乱させる一因になっているものと考えられる．

5．「再上陸」がもたらす弊害

台風中心が内海を通過した場合には「台風は○時頃広島県A市付近に再上陸した」といった情報が発表されるのだが，これは考えてみるとおかしな話である．直径数百 km の台風が池のような内海をその中心が通ったからといって「再上陸した」と発表する必要があるのだろうか*1．

言葉からものごとを判断するタイプの人の立場で考えてみると，その台風の大きさは内海の幅よりもかなり小さいものとなるはずである．そのうえ，再上陸地点が上陸の場合と同様に市町村単位で示されるのだから，人々は，「台風は小さいのだ」という暗示をくり返しかけられているような状態になっているではないだろうか．

また，上陸・再上陸のほか，中心が現在どこにあるかという情報が刻々(毎時)発表されることから，人々は，中心が最も危険なのだ(中心が来なければ大丈夫だろう)と思い込むようにもなっているようである．

筆者の以前の経験では，「台風は今どこか」と尋ねてくる人は多いが，「台風の中心は」という人はいない．その質問者の多くは中心位置を聞いただけで納得するらしいので，かえってこちらが心配になるぐらいであった．また「台風は来るのか」という質問も多いのだが，これには毎度返答に窮した．質問者に尋ねてみると，その意味は「台風の中心が自分の住んでいるX市を通るのか，Yes か No か」という主旨（かそれに近い感覚）だということが多かったのである．

6．部外への情報・解説では「台風の中心は」とすべきである．

気象庁部内では，「台風の中心は」と言うべきところを「台風は」と言い習わしている．部内でのやりとりであれば問題はないのだが，その習慣が部外でも一般化しているところにも誤解の原因があるようだ*2．

「台風は」と言えば本来は台風全体を指すわけだが，台風というものを経路図上の点と認識している人であれば，それは言葉どうり台風全体を意味するものと素直に理解（誤解）することになるだろう．

「上陸」や中心が必要以上に重視される原因は，このように中心を指して「台風」と呼ぶところからも来ているものと考えられる．従って，部外への情報や解説では必ず「の中心」をつけるべきである．例えば，

「台風の中心は○○付近にあり…」

「台風の中心は○○付近を通過し…」

などである．

その外に「外れる」や「かすめる」なども使われている．だがこれらの用語が単に台風の中心の経路を表現するために用いられるのであれば「上陸」や「再上陸」と同じ弊害を生じることになるだろう．

8719号の場合，最も被害の大きかったのは，台風の中心が上陸した高知県でも，通過した徳島県でも，また再上陸した兵庫県でもなかった．それは，台風の中心がかすめた香川県であり，コースから外れた鳥取県であった．この一例は大変教訓的ではないだろうか．

もっともこの種の「教訓」は数え上げればきりがない．さきの9311号がそうであったし，リンゴに未曽有の大被害をもたらした9119号の中心は青森県のはるか

*1瀬戸内海では海上に県境が引かれている．この点からも内海と陸とを分ける必要がないことになる．

*2最近は台風指示報（気象庁本庁の部内情報の一つ）では，「台風の中心が上陸」となっていることが多くなったと聞いているが，筆者は，放送・新聞とも「の中心」がついた上陸報道はまだ見たことがない．

NII-Electronic Library Service

Meteorological Society of Japan

沖を通ったのである，などなど…である．

莫大な損害と引き換えに遺されたこれらの教訓は，上陸・中心偏重の是正に有効に活用したいものである．

7．台風情報を正しく理解してもらうために

- 情報の重点を暴風と豪雨の動向におく．
- 中心は台風（全体）を代表するものであるが台風そのものではないことをはっきりさせる．
- 中心の上陸が最重要情報であると受け取られるような扱いはしない．
- 上陸の情報は「上陸」を用いない表現が望ましい．「四国沖を北上中の台風○号は○時頃その中心が高知市付近に達した」のようにである．（「上陸」を使うのなら「台風の中心が上陸」である）
- 本土の一部が暴風域に入る状況になれば（実際上の上陸なのだから）「上陸のおそれ」は使用しない．
- 中心位置の表現には必ず「の中心」をつける．
- 「再上陸」の情報はやめる．
- 以上の主旨を報道機関や市民に理解してもらう．

補遺　もう一つの誤解用語『宣言』

比喩的用語が誤解を生む例としてもう一つ，梅雨や桜に用いられる『宣言』がある．もっともこの方は1960年代から使われるようになったマスコミ用語なのだが，いつの間にか（その生みの親にまで）気象庁の用語だと思い込まれるようになってしまったため，誤解や行き違いがたびたび起こったのであった[*3]（最近は『宣言』の使用は減ってきたようである．今年の梅雨の入り・明けを報じる大阪の各紙はほとんど「発表」を用いていたし，放送でも一部の局から『宣言』が聞かれる程度であったと思う．ただし今年の桜の開花は各紙揃って『宣言』であった）．

「宣言といういい方にはどうもなじめない」という天声人語氏は，「あいまいなものをむりに明確にしようという癖がわれわれにはあって，これは戒しむべきことなのだが」としている．（1980. 7. 20）

その「むりに明確にしようという癖」は台風にも現われているようである．「上陸」は現実か幻か，というこだわりや，台風の中心の上陸を『上陸宣言』的に扱う姿勢がそれに当たるだろう．

気象という境目のない自然現象は，事件・事故とは異なり，「5W1H」の原則には本来なじみにくい対象ではないだろうか．「上陸」の扱いについても『宣言』同様にご一考を願いたいのである．

（日本気象協会奈良支部　松本　久）

*3・気象庁広報室（平塚和夫），1983：やめてもらいたい言葉，梅雨・開花の宣言，気象庁ニュース915号．
・松本　久，1987：「宣言」という言葉について，測候時報，54，4，201-205.

「会員の広場」松本久氏の意見に対するコメント

大西晴夫（気象庁予報部予報課）

「会員の広場」に投稿された松本久会員の「台風の上陸」という用語を用いることから生じる弊害についての指摘に関連して，気象庁で台風予報に携わってきた立場から若干のコメントをしたい．

まず，台風の中心が海岸線を横切って内陸に達したかどうかだけを問題にすることに対する批判についてはまったく同感である．気象庁も同じ見地から，台風中心が「上陸」するかどうかよりも，暴風域に入るかどうか，どの程度の大雨が見込まれるかなどに力点を置いて情報を出し，解説を行うように心がけている．

最近は台風情報の作成過程も計算機との対話処理が進み，「台風第○号の中心は北緯○度，東経○度にあり」と自動的に「中心」が付加される仕組みになっており，上陸についても「台風の中心が知歌山県南部に上陸」と「中心」を付けて表現することになっている．しかし，報道関係には，できるだけ短い言葉でインパクトのある報道をとの別の論理があり，「台風の中心が上陸」ではなく「台風が上陸」の見出しが紙面を飾ることになるが，このことに対して特に「行政指導」などは行っていない．

一方，台風の眼は穏やかな気象状態であっても，そのすぐ外側で域内の最大風速や最大降水強度が観測されることが多く，中心が通過した付近の被害が最も大きいのが一般的であるため，「中心」が防災上の情報価値をもっていることも否めない．進路予報を表現するのにも，中心がどう移動するかで説明するのが一番無理がないし，理解もされやすい．

結論的にいえば，「中心」に過度のウエイトをかけることは正しくないと同時に，「中心」を無視してしまうことも行き過ぎだと思う．「上陸」という用語が適切かとの問題は残るが，今後とも防災に役立つ情報の出し方に配慮しながらこの問題に対処していきたい．

NII-Electronic Library Service